

台湾語「有+VP」と日本語「V+テアル」との対照研究

－構文・意味を中心に－

A Comparative Study of “*ū-V*” in the Taiwan Minnan Language and “*V-tearu*” in the Japanese Language

－With a focus on their structure and meaning－

陳麗君

TAN Lekun

ABSTRACT

No research has yet been conducted on the comparison between existential verbs in the Taiwan Minnan language and the Japanese language, even though these two languages show much similarity at the semantic and pragmatic level. The focus of this research is the comparison of the existential verbs “*ū-V*” in Taiwan Minnan and the “*V-tearu*” in Japanese and the exploration of the aspects and modalities in these existential constructions. This research uses material from two language databases that are coeval and analyzes the similarities and differences in their process of grammaticalization.

Keywords : 台湾語「有+V」、日本語「V-テアル」、アスペクト、モーダル、文法化

0. はじめに

様々な言語において、存在動詞が文法化した例は多い。例えば、現代英語の動詞haveもhave a bookのような本動詞から準 (quasi-) 助動詞have a book to read (読むべき本を持つ) もしくはhave to read a book (本を読まねばならない) を経て、have read a bookのような助動詞となった。さらに、we've built a new garageのように、助動詞は接辞になることもある (Bybee 1985, Bybee and Dahl 1989)。現代日本語においても、存在を表す動詞「アル」「イル」が形態的に文法化して補助動詞「テアル」「テイル」となり、指示的機能から文法的機能へと変化した (日野2001: 80)。現代中国語の存在・所有動詞「有」

においても、本来「有」の下接は名詞だけに限定されていたはずであったが、近年、用言にもつながるように変化してきている。つまり、「有1本書」(本が一冊ある)から「有讀書」(本を読んである)になり、「有+N」だけの構文ではなく、「有+VP等」構文も用いられるようになってきた。このような変化を遂げてきたことにより、「有」の動詞性と存在義が薄くなり、コミュニケーション機能として主体化したことでモダリティとしての意味特徴が現れるようになってきた(陳2012)。これらの言語変化は指示的機能から文法的機能へと移り変わっていくという共通性があるが、もちろんそれぞれの言語における個別の事情があり、また流動的でもある。

このような存在表現の普遍性と個別性について、次の例を見ながら日本語、中国語、台湾閩南語(以下台湾語と略す)を比べてみる。これまで日本語のテアル表現に対応する中国語は、持続補語の「V着」あるいは完了相アスペクトである「V了」に対応するとされてきた(王1996、王2007、丸尾2007、北村2011、鄭2010)。しかし、現代中国語、特にメディアの言語使用において「有+V」が用いられるようになってきており、これは流行文化の源である香港、台湾からの影響によるものとされている(孫2003、楊・董2003)。そして結果的に、これは日本語のテアル表現と対応していることにもなる。

言語	存在動詞アル	存在様態テアル	行為存在テアル
日本語	机の上に本が <u>ある</u>	机の上に本が置いて <u>ある</u>	本を <u>読んである</u>
中国語	桌子上 <u>有</u> 一本书	桌子上放着 <u>一本书</u>	书读了
台湾中国語	桌上 <u>有</u> 一本书	?桌子上 <u>有</u> 放一本书	<u>有</u> 讀書
台湾語	桌頂 <u>有</u> 1本冊	桌頂 <u>有</u> 囵1本冊	<u>有</u> 讀冊

中国語と台湾語との言語接触が増えたため、中国語における台湾中国語「有」の用法に影響された文法化現象が加速され⁽¹⁾、その影響のもととなる台湾語「有」の研究も近年注目されるようになり重要視されている。また、以上の例から台湾語と日本語はとても近いように思われる。二言語とも存在という基本義から抽象化、文法化のプロセスを経て、動詞から機能詞に到っており、主体化現象もほぼ同様である。とはいえ、台湾語の「有～」は日本語の「～テアル」と完全に対応しているわけではない。台湾語は、日本語の「V+テアル」と同様に「有+VP」構文で行為・動作の様態と存在を表すが、動詞への膠着に限らず「有」はさらに形容詞と接続して存在の性質をも現せる。また、語順を変えて「V+有」とすることで、動作が達成されたかどうかに関心を絞る用法もある。例えば、台湾語「Thàn 有 錢(稼ぐ ある 金)」に対応する日本語は「テアル」ではなく、「お金を稼げる或いはお金を稼いだ」になる。もっと言うと、日本語アスペクト形式のテアルは変化後・結果の存在状態を示すのに用いられるが、台湾語「有+V」は異なる時制のアス

ペクトと共に起して、動作の未来、現在進行、過去、経験相といった動きの各側面の存在を示すことができる（陳 2012）。

本稿は、これまで研究されてこなかった日本語「テアル」と台湾語の「有」の対照に注目し、存在義を中心に発展した存在型アスペクト構文の異同に焦点を絞り、共時的なコーパス分析を通して二言語の構文・意味の体系的な異同を明らかにする。

1. 先行研究

1.1 日本語「テアル」

伝統的な現代日本語「テアル」の研究は、対象ガ+テアル／対象ヲ+テアルという統語的な構文特徴に基づいて、二元対立的な意味特徴を捉えてきたものが多かった。森田(1971)は、テアルには「ガ ～テアル」と「ヲ ～テアル」という二種の構造とその意味上の相違があると指摘し、さらに、益岡（1987：228）はこの二種の「テアル」の意味特徴を「対象指向性」と「行為指向性」とし、その後、森田（1989）は「行為の結果の残存」対「前もっての準備、結果の蓄積」、小泉他（1989）は「結果の持続」対「有効性の持続」、原沢（2005）は「受動型」対「能動型」であるとしている。そのなかでも益岡（1987：219～233）によるテアルの意味領域は体系性が有り、数多くの研究の土台となっている。彼は統語的（受動・能動）な観点からテアル表現をA型とB型との2つの類型に分けた。

A型構文の意味特徴「場面描写表現・対象指向性」：意志的行為の結果生じる、対象の存在その他の状態が、視覚で捉えられる形で存続していること。

A1：広義の存在表現の一種

(1) リビングテーブルには花が飾ってある。（平岩弓枝「湖水祭」）

A2：対象に認められる、何らかの状態の存続を記述する。

(2) 入り口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある。（本多勝一「カナダ・エスキモー」）

B型構文の意味特徴「行為指向性」：行為の結果もたらされる事態の、基準時における存続性や有効性を表す。

B1：行為の結果もたされる事態が基準時において引き続き存在しているという結果の事態の存続の意味を表す。

(3) 住宅は11棟で、ベッドルームは150室を確保してあります。（読売新聞 1983. 8.26）

B2：単に行為の結果が基準時（及び、それ以降）において何らかの有効性を示すという意味での結果相を表す。

(4) それで、京都府警に鑑定をたのんであるの。（山村美紗「ガラスの棺」）

さらに益岡（1987：232）は、このテアル表現の全体像が、A1型からA2型、B1型を経てB2型に至る一つの連続体を構成していると言う。つまり、テアル表現の意味領域はA1型の領域とB2型の領域を両極とする連続体を成している。「結果性」という意味特徴を共有しながら、この表現の意味領域は具体性の最も高いA1型の領域から、抽象性のもっとも高いB2型の領域までの広い範囲を含んでいるのである。

また、従来「テアル」はアスペクトとして意志的行為の結果もたらされる状態を表す「結果相」表現だとされており、テアルの持つ意図性・意志性は重要な特徴だとされてきた（高橋1969、森田1977、寺村1984、益岡1987など）。それに対して、最近では非意図的テアルもあることが注目を集めている（寺村1984、杉村2002、原沢2005など）。

しかし、台湾語は統語的に日本語とは大きく異なり、まず自・他動詞の分類がなく、また、とりたて詞もない。つまり、「有（テアル）」の動作の対象としてヲ格またはガ格という区別がない。さらに、主格名詞の有情物・非情物による、テイル／テアルの使い分けもない⁽²⁾。したがって、以上のような方法論で、つまり能動と受動という二元対立的な統語特徴で日本語と台湾語とを対照分析するのは不適切なように思われる。

一方、日本語のアスペクト論に注目して考えた場合、Perfective（完成相）とImperfective（不完成相）というアスペクトの定義から発展して、スル（完成相）とシテイル（継続相）という時間性の根幹に位置する日本語アスペクト体系⁽³⁾もあり、テイル／テアル形式を事態の存在として把握する研究も目立つ。例えば金水（1996）は、存在型アスペクト形式を動詞のテ形、または連用形に存在動詞が膠着し動詞のアスペクト的な意味を変更する形式であると規定した。また、存在型アスペクト形式は、ある出来事に何ものの「存在」が強く含意されればされるほど「ある」の原型的な意味に近くなり、「今」「ここ」が薄まるほど文法化が進んでいるとしている。さらに、この文法化が進む段階を存在文>進行態⁽⁴⁾／既然態⁽⁵⁾／メノマエ性⁽⁶⁾>パーフェクト性>過去など、と示した。このような文法化の進み過程は、益岡（1987）が提示したテアル表現の全体像の連続体構成を、さらに発展させたものとも考えられる。

金水の存在型アスペクト形式を受けて、岡（2001）は存在論的な観点から認知言語学的分析を用い、テイル構文とテアル構文はともに以下のような中心的存在構文からの拡張したネットワーク構造と主体化の進み過程を持つと主張した。

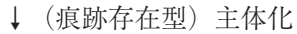
中心的存在構文 (YニXガイル／アル)



存在様態型構文 (YニXガVテイル／テアル)



結果存在型 (XガVテイル／テアル)・過程存在型 (XガVテイル)



出来事存在型・行為存在型 (XハVテアル)

岡 (2001) が挙げたそれぞれの構文の例を以下に示す。

- (5) あそこに鳥がいる。(中心的存在型テイル構文)
- (6) 机の上に本がある。(中心的存在型テアル構文)
- (7) あそこに鳥が飛んでいる。(存在様態型テイル構文)
- (8) 机の上に本が置いてある。(存在様態型テアル構文)
- (9) 窓があけてある／あいている。(結果存在型テアル／テイル構文)
- (10) 子供が遊んでいる。(過程存在型テイル構文)
- (11) また、子供らが泥だらけの足で歩いている。(痕跡存在型)
- (12) あの女は犯人だ。被害者がそう証言している。(出来事存在型)
- (13) 論文は完璧に仕上げている。これで試問は大丈夫だろう。(行為存在型)

さらに、李 (2007) は益岡 (1987) および岡 (2001) のテアル・テイルのネットワークを踏まえて、テアルの構造形式における要素と構文意味との相関関係に注目した。90作品からテアルの例を採集し分析した結果、テアル構文を「存在様態文」「結果状態文」「行為経験文」の三つに分類した。李 (2007) の存在様態文は益岡 (1987) のA1に同等し、結果状態文はA2で、行為経験文はB型構文に当てはまる。

台湾語の「有」は、日本語におけるテアルと同様に文法化が進んできており、存在動詞からアスペクト形式および主体化へと発展している。このことから、本文では、金水(1996)の文法化の進み段階を踏まえ、岡 (2001) のテイルとテアルで構成したネットワークをモデルとして台湾語との対照を行っていく。また、李 (2007) のコーパスによる調査結果をもって、台湾語と日本語の各存在型アスペクト形式の使用頻度の違いを照らし合わせることにより、二言語における文法化の進み度合いの比較を試みる。

1.2 台湾語「有+VP」における先行研究

これまで台湾語「有+VP」の用法と意味は、中国語の文法分析を土台に⁽⁷⁾現代中国語の「了」と翻訳されることが多く、台湾語の「有」は中国語の完了アスペクト (Perfective

Aspect)「了」と同位語であるとした研究が多かった(湯1994、蔡2002等)。それに対して曹・鄭(1995)は、台湾語「有+VP」は過去アスペクトあるいは完了した事件だと誤解されやすいが、すでにCheng(1979:169)が「有」はある事件が時間の流れの中に存在したことを現すということを、2つの理由で証明したと言っている。その理由の一つは過去の事件においては「有」を用いなくてもよいとのこと(以下、台湾語表記について、引用したコーパスや文献に示されたままの形で表す。台湾語表記には漢字だけと、ローマ字漢字交じり、及びローマ字だけの三通りがある)。

- (14) 伊 昨方 來 (過) 兩pai。(彼は 昨日 二回 来た)
 (15) 伊 明仔載 若 有 來, …。(彼は あした もし 来る ことが あれば)

もう一つの理由は、未完成副詞「猶未(まだ)」に対照しているものは完成アスペクトの「ah(た)」であり、「有」ではない。つまり、台湾語「有」は過去あるいは完成アスペクトではないということである。

- (16) 伊 (已經) 來 ah (彼は (すでに) 来た)
 伊 猶未 來 (彼は まだ 来ていない)
 (17) 伊 有 來。(彼は 来て いる)
 伊 無 來。(彼は 来て いない)

曹・鄭(1995)によると、台湾語の「有」には五つの用法がよく見られる。それぞれの用例を以下に示し、下に日本語訳をつける。

- (18) (台) 厝内 有 儂客。(存在用法)
 (日) 家の中に お客が いる。(存在表現)
 (19) (台) 我 有 三箍銀。(領屬用法)
 (日) 私は 三元 を持っている／がある。(所有表現)
 (20) (台) 有 儂 來 啊。(呈現用法)
 (日) ある人 が 来た。(呈示表現)
 (21) (台) 我 有 買 張教授 e 冊 啊。(存在貌用法)
 (日) 私は 張先生の本を 買ってある。(存在アスペクト表現)
 (22) (台) 花 有 紅。(強調用法)
 (日) 花が 赤 である。(強調表現)

前二者における「存在」と「所有」の「有」は動詞であり、存在と所属関係を表している。一方、後三者（呈示、存在アスペクト、強調）では情態動詞である。しかし、これだけでは「有」のさまざまな構文形式とその意味関係は明らかではない。そこで、陳（2012）は台湾語構文の形式と意味領域をはじめてコーパスを使ってまとめた。その結果、「有」の構文と語意には以下の5類があるとしている。

1. 所有 構文形式：「 \bar{u} （有）+ NP」、103例

(23) *goá \bar{u} 1 ê ché-ché.*

わたしは いる／ある ひとり あね。(私は姉が一人いる)

2. 存在 構文形式：「 \bar{u} （有）+（数量詞+）NP類⁽⁸⁾」、282例

(24) *chín-chêng \bar{u} , chit-má bô áh.*

(前は あったが、今は ない よ。)

3. 物事の性質、数量の程度 構文形式：「 \bar{u} （有）+ 副（数）詞（+ NP）」、30例

(25) *\bar{U} chiok chē mih-kiāⁿ lóng hō in chò.*

ある たくさん 物 全部 られる 彼ら 作る (彼らによって作られたものがたくさんある)

4. 動作・事件の存在、人・物・事の状態

構文形式 i：「 \bar{u} （有）+（時態副詞）+ VP（+動詞アスペクト）」、248例

(26) *Góa \bar{u} khòaⁿ pò-chúa.*

わたしは ある 読む 新聞 ((私は)新聞を読んである)

構文形式 ii：「 \bar{u} （有）+（副詞+）AP」、6例

(27) *\bar{U} chiah-ní giâm-tiōng.*

ある こんなに ひどい (そんなにひどいことあるんだ)

5. 実現可能、結果 構文形式「V+ \bar{u} （有）」、11例

(28) *He thàn- \bar{u} chíⁿ hoⁿ?*

あれは 儲ける ある お金 でしょう (あれは 儲かる よね)

前三者の「有」は動詞であり、現代中国語の「有」用法とほぼ同じである。後二者は中国語にはない台湾語に特有のモーダル表現である。陳（2012）はTraugott（2010）の（間）主体化概念を用い、「有」は推論（inferencing）によって客観的な物事の存在（および所有）（有+NP）から行為の存在（有+動名詞）に変化し、さらに話し手と聞き手の主観的な態度（行為存在の確認・質疑）（有+VP）を表すような語意・語用的な変化が一連続の文法化プロセスとして生じたと論じている。

注目してほしい点は、台湾語の第4類「動作・事件の存在、人・物・事の状態」の意味

を示す構文の形式が「[ü (有)] + VP」、139例⁹⁾、「[ü (有)] + V + kòe (経験)」、43例、「[ü (有)] + V + tìoh (達成)」、13例、「[ü (有)] + tih/teh/leh (進行) + VP」、44例とあるように、現在・経験、達成、進行などといったアスペクト動詞と共起していることが多く見られたことである。つまり、日本語の行為経験・存在テアル構文はパーフェクトアスペクト(経験済み、結果)であると言われているのに対して、台湾語の行為経験・存在構文は未完成(Imperfective)アスペクトにも用いられるのである。本研究ではそこに注目して、台湾語「有+用言類」と日本語のテアル構文要素・形式・意味領域を対照し、二言語の存在型アスペクトの異同を明らかにしたい。

2. 台湾語「有+VP」と日本語「テアル」との構文構造上の違い —台湾語と日本語との存在型アスペクトの使用頻度—

まず、日本語のテアル構文の使用頻度について、李(2007:3)は90作品の分析から、三種類の構成要素構文とその使用頻度を次のように示した。

- [1] 存在様態文：【[場所]に [物]が 物の位置変化Vt-テアル】(963例、66.9%)
- [2] 結果状態文：【[物]が 物の状態変化Vt-テアル】(108例、7.5%)
- [3] 行為経験所有文：【人は {…} 変化Vt-テアル】(221例、15.3%)

このように、日本語の存在型アスペクト形式は空間性や場所性を帯びた「二格」を持つ存在様態文がもっとも多く、66.9%の割合をも占めている。これはある場所での対象物の存在・位置の変化を描写した情景描写文である。これと近い関係にあるのは結果状態文であり、結果状態文は存在様態文とともに描写文である。両者の違いは、結果状態文は二格を取らず、対象がある行為を受けて変化した後の状態に焦点があり、可視的で持続していることが特徴である。この二つの構文は益岡のいうA型にあたり、対象指向的な記述をするタイプに相当する。A型に対して、行為経験所有文はB型で行為指向的である。行為経験所有文においてテアルを下接する動詞は、人の認識・状態変化を示す他動詞と物の変化を表わす他動詞が最も多いが、行為経験所有文はテアル構文全体の15%ほどしかない。

これと対照するため、台湾語の「有」の使用頻度調査では「教育部台湾閩南語字詞類統計(文部省台湾閩南語頻度統計)」¹⁰⁾というコーパスを用いた。日本語と比較するために、「有」が用いられた例を「二格(場所格)を取る」「対象が主格で変化した可視的な状態」「行為者(経験者)」という基準で分類分析をした。しかし、行為経験文という枠だけで台湾語の「有」を分類するのは難しく、岡(2010)のアスペクト構文とパーフェクト構文の概念をも参考にし、結果状態文を結果存在文と過程存在文に別け、行為経験文の概念¹¹⁾を拡大して行為存在文とした。結果存在文も過程存在文も進行と結果の両方の意味を持つアスペクト型であるが、結果存在文は対象の状態変化を示し、結果に焦点を置く傾向がある。

過程存在文では動作主がある動作の進行過程に焦点を置く傾向が見られた。そして、行為存在文はパーフェクト型に近い構文である。

コーパスで「有」が用いられた構文を調べた結果、全体的に「有+NP類」が520例(78%)で最も多く、その次は「有+VP類」で95例(14%)があり、「有+形容詞」は50例(8%)で、最も少なかった。日本語の「テアル」構文に対照する台湾語の「有+VP類」構文の種類を下に示した。二言語における構文の種類の使用割合が随分異なっていることが見て取れる。

- [1] 存在様態文：(場所ニ…V-テアル) 12例、(13%)
- [2] 結果状態構文(アスペクト構文)：結果存在文(物が…V-テアル)、過程存在(行為者が…V-テイル)：13例、(14%)
- [3] 行為存在構文(パーフェクト構文)：(行為者・経験者は…V-テアル/テイル) 66例、(73%)

二言語を対照してみると、日本語「テアル」構文は二格を取る存在様態文がもっとも多く用いられ、66.9%であるのに対して、台湾語には空間性と場所性の名詞あるいは場所前置詞という要素を取る「有+VP」構文は13%しかなかった。その反面、日本語では行為経験文が15%しか用いられていないのに対して、それに近い台湾語の行為存在構文はもっとも多用されており、73%の割合を占めていた。この違いは、言語における構文表現の個別性と異なる文法化の進み具合によるものだと考えられる。言語による構文表現の個別性については、日本語存在型アスペクト構文と対照しながら中国語と台湾語の例で説明する。

台湾語と日本語における情景描写文である存在様態型の使用頻度差について、まず言語における構文表現の個別性から考える。存在様態型の例文(29)で示したように、日本語の「テアル・テイル」アスペクト型に対応する表現は、中国語では「～着」で動作後の持続的かつ静的な状態を表す。これに対応する台湾語は「場所+有…設置する動詞(掛けてある/掛けている)」という表現で情景を描写する。日本語の設置動詞に対応する中国語も「～着」で示し、これも静的な情態を表すことができる。しかし、このような静的存在状態を示す場合、台湾語構文は「有(掛)」を用いるが、動詞「掛」が省略されやすく、「有 一幅圖」、即ち「有+N」という存在文で静的な情景を描写する傾向がある。つまり、位置動詞などで静的な情景を描写するには、日本語では「場所…テアル」が多用されるのに対して、台湾語では「場所に…アル」と用いる傾向があると考えられる。

[1] 存在様態型（広義の存在文、出来事の静的な情景描写文）

- (29) (日) 壁に 絵が 掛けてある／掛っている。
 (中) 牆上 掛著 一幅畫。
 (台) 壁頂 有 (掛) 一幅圖／壁頂 掛 一幅圖。

[2] 過程存在型（アスペクト型）（進行相と結果相の両方を表わせる、動作の進行相に焦点）

- (30) (日) 子供が 授業外活動に 参加している／である。
 (中) 小朋友 參加 (了) 課外活動。
 (台) 囡仔 有 (teh) 參加 課外活動。(進行相に焦点)

[3] 結果存在型（アスペクト型）（進行相と結果相の両方を表わせる、動作の結果相に焦点）

- (31) (日) 窓が 開けてある。／ 窓が 開いている。
 (中) 窗戶 開著。
 (台) 窗仔門 有開 (leh)。／窗仔門 開開。

[4] 行為存在型（パーフェクト型）（話者の態度、判断、主張を表わす）

- (32) (日) 彼に 話してあった。
 (中) 我 告訴 他 了。
 (台) 我 有 ka 伊 講 (ah)。

次に、文法化の進み度合いの違いから日本語と台湾語の構文分布差を考える。基本構文である「存在文」は、人・物・事の具体的な存在義（所有）を叙述する。そこに話し手の視点を入れたものが存在様態型構文であり、一種の拡大の存在文とされ、話し手によって物体の静的な位置関係が示されている。寺村（1984）が指摘した通り、抽象化が進んだことで、「結果状態」は眼前の情態をある過去の出来事の痕跡であると解釈する思考が存在しており、ある物事の存在は主体によって知覚されている。結果状態型は動詞の種類によって「過程存在」と「結果存在」に分けてあるが、両者とも進行及び結果の意味を同時に捉えることができる。例(30)「過程存在」が進行相に焦点を置くのに対して、例(31)「結果存在」は結果相に焦点が当てられているように思われる。両者とも主体によって知覚される意志的な行為の有効性の持続として捉えられるため、ディスコース場面に応じて意図性があるかないかの判断が変化する。さらに例(32)「行為存在型」になると、動的な動きのパーフェクト相に焦点が当てられ、明らかに話者の態度・判断・主張といった主体的な視点が出

されており、ディスコース上においては動作の確認という語用的機能が付与され、いわゆる意図性（意志性）が具現化することが多い。このように、具体的な存在義が薄まっていき、話者の視点及び態度の表出であるモーダルの用法になり、文法的になる現象は主体化（subjectification）である。

以上の「有～（～テアル）」の主体化現象の進み過程について、存在様態型はもっとも中心的な存在義に近い。しかし、具体的な存在義が過程存在型、結果状態型を経て、さらに行為存在型へ文法化されていくにつれて存在義は薄まっていく。その一方、ディスコース上の機能、つまり主体による意図性は強くなっていく。そして、日本語テアル構文には存在様態型がもっとも多かったのに対して、台湾語には主体化した行為存在型構文がもっとも多かった。これは、二言語の存在型アスペクト構文における文法化の進み度合いが異なるためだと考えられる。台湾語の存在動詞のほうが日本語のテアルよりも文法化が進んだのではないかと考えられる。

3. 台湾語の行為存在型構文に対応する日本語存在型アスペクト構文

1節で紹介したように、台湾語では「動作、事件の存在および状態性質」を表す「有+VP」構文には、「有+VP」、「有+V+kòe（経験）」、「有+V+tioh（達成）」、「有+tih/teh/leh（進行）+VP」などの形式があり、現在、進行、経験、達成などといったアスペクト動詞要素との共起が見られた。以下では、それぞれに対応する日本語の存在型アスペクト構文を示す。

ア、台湾語「ū（有）+VP」類=日本語【人は {…} 変化V_t-テアル】

日本語の行為存在型にもっとも近い構文形式を持つ台湾語構文は「有+VP」である。ディスコースの場において話し手が発話の場合、台湾語「有+VP」構文はある行為・出来事の有無を表出し、行為者が第一人称以外の場合、確認あるいは質疑の態度を呈示する。結果的なパーフェクトアスペクトである。

(33) *góa ū khòàⁿ pò-chúa.*

わたし アル 読む 新聞 ((私は) 新聞を読んである)

(34) *lí kám ū khi khòàⁿ hit ê pió.*

あなた か(疑問詞) アル 行く 見る あ の 時計 ((あなたは) あの時計を見に行つてあるか)

- (35) 我 做兵的時陣 有 看 36本 冊, 是 一套 物理學 的 冊 (洪惟仁 (2007) 台灣閩南語趨勢變化調查)
わたし 軍人をやるとき アル 見る 36冊 本、である セット 物理学 の 本(わたしは軍人をしている(軍隊に入っている)ときに、36冊の本を読んだ。物理学の本である。)

イ、台湾語「ū (有) +V+kòe (過) (経験アスペクト)」

=日本語【人は {…} V_t-タことがアル】

台湾語「有+V」は動作の経験を表すアスペクト「kòe過」と共起して、ある動作の経験の有無について話者の確認や態度を示す。それに対応する日本語は「Vたことがアル」であり、アスペクト型ではない統語形式になっている。

- (36) *lí ū khòàⁿ-kòe* 嗎?

あなた アル 見る タ(経験アスペクト) か? ((あなたは)見たことがあるか?)

- (37) *lí kam ū tī Ko-hiông chē kòe* 捷運.

あなた か(疑問詞) アル で 高雄 乗る タ(経験アスペクト) MRT ((あなたは)高雄でMRTに乗ったことがあるか)

ウ、台湾語「ū (有) +V+tioh (著) (達成アスペクト)」

=日本語【人は {…} V_t-タ】、【人は {…} V_t-テシマウ】

台湾語「有+V+tioh (達成アスペクト)」には、例(38)のように動作が済んだことで、話し手にとってはある目的の達成と、例(39)(40)のように望ましくない結果をもたらしたとの意味評価が伴う場合がある。それに対応した日本語は「V_t」或いは「V_tテシマウ」だと考えられる。金水(2001:67)によると、シテシマウ(シテシマッタ)は時間性の面で、スル(シタ)と基本的には変わらない。その意味は、動作を完全にすませるという意味を表す場合と、表された運動が話し手にとって望ましくない結果をもたらすという評価的な意味を表す場合とがある。

- (38) *Chit-kái ū khè tiòh góa kám-kak chiok hoaⁿ-hí ê.*

今回 アル 取る タ(達成アスペクト) わたし 思う とても うれしい の (今回取れたことをとても嬉しく思う)

- (39) 我 有 看 著 媽媽 流 目屎 (陳恆嘉(2007)「媽媽請你保重」台灣閩南語朗讀文章選集)

わたし アル 見る テシマウ 母 流す 涙 (わたしは母が涙を流しているのを見た)

- (40) 老父 tī 30外歲 ê 時, 有染著重病險死 (頼仁聲 (1924)「十字架的記號」台灣教會公報社)

おやじ に (時間前置詞) 30何歳 の とき、アル 患う てしまう 危うく 死ぬ (親父は30何歳のときに、大病を患ってしまい、危うく死ぬところだった)

エ、台湾語「ū (有) + tih/teh/leh (進行アスペクト) + VP」

= 日本語【人は {…} Vt-テイル】

以上に見た台湾語「有」構文は、動詞とその後ろの経験・結果のアスペクトとがパーフェクト的の側面を表わしているが、さらに台湾語の「有+VP」構文は動詞の前にある「tih/teh/leh」という進行相アスペクトとも共起し、主体の継続動作の有無を示すことができる。つまり、「有+tih/teh/leh (進行アスペクト) + VP」は時間的な構造において未完了の過程を示している。それに近い日本語表現は「～テイル」であるが、出来事の実態を現在存在するものとして理解することも考えられる。

- (41) *góa ū tīh phah ê sī* 羽球lah

わたし アル テイル やる の-形式名詞 バドミントン よ (わたしがやっているのはバドミントンだよ)

- (42) *ū tīh chāu sím-mih siā-thōan?*

アル テイル 走る 何 サークル (何かのサークルに入っている?)

- (43) 有 teh 幫贊 主日學 ê 工。

アル テイル 手伝う 日曜学校 の 仕事 (日曜学校の仕事を手っている)

以上に見たように、台湾語の「ū (有)」は「ū (有) (+進行アスペクト等) + 動詞 (+達成・経験など)」という統語形式のように動詞の前の進行アスペクトか、動詞の後ろの達成・経験・完了等のアスペクト要素と共起していて、話者の態度・判断・主張を表すようなモーダル機能詞として働く。このことは、台湾語「ū (有)」が存在動詞「有+N」からアスペクトを表す助動詞「有+VP」に、さらにはモーダルの、すなわち「有 (+進行アスペクト動詞) + 動詞 (+達成・経験等のアスペクト動詞)」のように使われる形式語へと変化していることを示唆している。それぞれに対応している日本語はV-テアル/V-テイルの相補的な存在構文体系¹²⁾、およびV-タ/テシマウなどである。

このほかには、例(44)のように形容詞と連動して、「有+ (副詞+) AP」という構文要素で「人・物・事の状態・性質の存在」を表すこともある。先行研究においては「有+形容詞」構文を強調的な意味で取ることもあるが、存在義からの拡張として人・物・事の状態・

状態の存在の有無という話者の判断・主張を表すという報告もある（陳2012）。また、例(45)のように「有」と動詞の語順を変えることで、「有」が動作の補助動詞となり、ある動作が目標を達成する可能性の有無を示すこともある。これらの表現は存在義から推論され、意味が抽象化したものである。

(44) *Ū chiah-ní giâm-tiông.*

アル こんなに ひどい（そんなにひどいことってあるんだ？）

(45) Thàn 有 錢。

稼ぐ ある 金（お金を稼げた）

4. まとめ

以上、本文ではこれまで研究されてこなかった日本語「アル」と台湾閩南語「有」の対照に注目し、存在義を中心として発展した存在型アスペクト構文の異同に焦点を絞りつつ、共時的なコーパス分析によって二言語の意味・構文の体系的な比較を試みた。

その結果、日本語テアル構文では二格を取る存在様態文がもっとも多く用いられ、66.9%であったのに対して、台湾語では13%しかなかった。その反面、日本語では行為経験文が15%しか用いられていないのに対して、それに近い台湾語の行為存在構文はもっとも多用されており、73%もの割合を占めていた。このような日本語と台湾語の「テアル」の構文の種類における使用頻度が異なるのは、言語における構文表現の個別性と文法化の進み具合の異なりを示していると考えられる。文法化の進み具合から言うと、日本語テアルはパーフェクト的アスペクトまで発展しているが、台湾語「有」はさらにアスペクトから話者の態度・判断・主張を示すモーダル機能詞にまで発展している。二言語における存在構文とその文法化の段階を図1で示す。図1に見られるように存在動詞の形式化にともなって、主体性を現すことが強まるようになり、意図性（意志性）がともないやすくなったと考えられる。しかし、これは動詞類とともにより詳しく考察する必要があり、次の課題となる。

図1：台湾語と日本語の存在構文形式

	存在構文形式		文法化 (主体化)
	台湾語	日本語	
存在文・所有文	(場所) 有 + 人、事、物	場所ニ…イル／アル	- ↓ 主体知覚 ↓ +
結果存在型	対象 + 有 + VP	対象…V - テアル	
過程存在型	行為者 + 有 + <u>tih/teh/leh</u> (進行(未完了過程)アスペクト) + VP	行為者…V - テイル	
行為存在型	行為者 + 有 + VP	行為者…V - テアル／テイル (パーフェクト構文)	
	行為者 + 有 + VP + <u>tioh</u> (達成アスペクト)	行為者…V - タ／テシマウ	
	行為者 + 有 + V + <u>kòe</u> (経験アスペクト)	V - タコトガアル	
			主体態度・判断・主張

注

- (1) 現代中国語の「有+N類」は下接要素が体言に限られており、「有+VP」が使えないため、否定文「没有+VP」／肯定文「VP+了」といった非対称な統語構造をなしている。そこから、文法化して否定文「没有+VP」／肯定文「有+VP」という対称的な構文になるのは単純化・経済化の原理に沿った言語の自然な発展である。また、言語外要素として、「有+VP・AP」が使える台湾語との言語接触によって台湾中国語においては「有+VP」の使用が普及しており、それがさらに中国にまで浸透している。
- (2) 中世末日本語の「～テイル」も「～テアル」もともに自動詞・他動詞の別なく接続していた(湯澤1929、坪井1976、福嶋2004)。
- (3) 奥田(1978)、工藤(1995)。
- (4) 進行態は、主語である動作主の存在を指す。
- (5) 既然態は、出来事の直接的結果の存在を指す。
- (6) メノマエ性は空間的な現前性を指す。
- (7) 湯(1994)は中国語の「有」と「了」は相補的な分布であるとし、「有」と「了」は完成アスペクトの同位語であるとした。その例として次のものが挙げられる。A他昨天來了(彼は昨日来た) B他昨天沒有來(彼は昨日来なかった) C他昨天來了沒有(彼は昨日来てなかったか)。
- (8) NP類は名詞句あるいは動名詞のことを指す。動名詞は名詞化した動詞、例えば進歩、成長などであり、日本語のする動詞と一部の特徴が似ている。
- (9) 「[ū(有)]+VP」構文のうち、「[ū(有)]+VP」が139例見られ、「[ū(有)]+連動(複合動詞)」が37例見られた。
- (10) 1880年代から現在に至る文字化した台湾語資料(報道、小説、歌謡、教材、講演、劇本、民話など)

を集めた百四百万語ほどの簡易コーパス。ほかの言語と比べてデータ量は少なめのようなのだが、これまでほとんど文字化されてこなかった台湾語のことを考えれば、かなり揃えられていると言える。
<http://kip.humanistic.org/bang-cham/thau-iah.php>, 責任者：楊允言。

- (11) 行為経験所有文は話し手の内面上に実現済みの行為が経験として内在していることを表す(李(2001:15))。
- (12) これまでテイル形は基本的に主体の変化の結果を表し、テアル形は客体の変化の結果を表す相補的な体系であるとされてきたが(益岡1987、金水2001等)、この枠組だと存在アスペクト体系を捉えきれないことも考えられる。

参考文献

(アルファベット順)

- Bybee, J. L. (1985) *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, J. L. & D. Östen (1989) "The Creation of Tense and Aspect Systems in the Languages of the World," *Studied In Language* 13, pp.51-103.
- Cheng, R. L. (1985) "A comparison of Taiwanese, Taiwan Mandarin and Peking Mandarin," *Language*, 61 (2), pp.352-377.
- 曹逢甫、鄭縈(1995)「談閩南語“有”的五種用法及其間關係」『中國語文研究』11、香港中文大學中國文化研究所吳多泰中國語文研究中心、pp.155-167.
- 蔡維天(2002)「台灣國語和方言中的「有」談語法學中的社會因緣與歷史意識」『清華學報』新32-2、國立清華大學出版社、pp.495-528.
- 福嶋健伸(2004)「中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」『国語と国文学』81-2、pp.47-59.
- 原沢伊都夫(2005)「テアルの意味分析-意図性の観点から」『日本語文法』5(1)、pp.20-38.
- 日野資成(2001)『形式語の研究-文法化の理論と応用-』九州大学出版会.
- 李京保(2007)「「～テアル」文の構造及び意味用法」『東京外国語大学日本研究教育年報』11、東京外国語大学日本課程、pp.1-19.
- 金水敏(1996)『日本語のアスペクト形式の類型』平成8年度国語学会秋季大会予稿集.
- 金水敏(2001)「シタとスルのアスペクト性・時制性」『時・否定と取り立て』、岩波書店、pp.3-92.
- 北村よう(2011)「存在文の日中対照-テイル/テアル/ラレテイルとそれに対応する中国語」『東海大学紀要. 国際教育センター』1、東海大学国際教育センター、pp.21-27.
- 小泉保他(編)(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 益岡隆志(1987)『命題の文法-日本語文法序説』くろしお出版.
- 丸尾真(2007)「中国語に見られる完了と結果の接点-“V了”と“V着”を例として-」『日中対照言語学研究論文集』和泉書院、pp.327-341.
- 森田良行(1971)「「本が置いてある」と「本を置いてある」」『講座 正しい日本語 第五巻 文法編』明治書院
- 森田良行(1977)「日本語の動詞について」『講座日本語教育』13、pp.114-134早稲田大学語学教育研究所
- 岡智之(2001)「テイル(テアル)構文の認知言語学的分析-存在論的観点に基づくアスペクト論の展開」『日本認知言語学会論文集』1、日本認知言語学会、pp.132-142.
- 杉村泰(2002)「意志性のないテアル構文について」『言語文化論集』24-1、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、pp.159-174.
- 孫琴(2003)「對話中の“有+VP”句」『南京師範大學文學院學報』3、pp.162-166.

- 高橋太郎 (1969) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 陳麗君 (2011) 「言語接触による言語変化と文法化現象の一例—台湾中国語“有”構文の分析を中心に—」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』 8、山形大学人文学部、pp.103-116.
- 陳麗君 (2012) 「台、華語語言接觸下的「有」字句」『台湾学誌』 5、pp.1-21.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.
- 湯廷池 (1994) 『漢語詞法句法五集』 學生書局.
- Traugott, E. C. (2010) "Revisiting Subjectification and Intersubjectification", in K. Davidse & L. vandelanotte & H. Cuyckens, ed, subjectification, intersubjectification and grammaticalization, pp.29-70. Berlin: De Gruyter Mouton.
- 王学群 (2007) 『中国語の“V着”に関する研究』 白帝社.
- 王忻 (1996) 「アスペクト表現の日中対照—シテアルほかの表現をめぐって」『国文学：解釈と鑑賞』 61-7、至文堂、pp.65-71.
- 楊文全、董于雯 (2003) 「語言變異：漢語“有+VP”句簡析」『語文建設通訊』 75、pp. 27-32.
- 湯澤幸吉郎 (1929) 『室町時代の言語研究』 大岡山書店.
- 鄭汀 (2010) 「存在表現における中国語の「着」構文と日本語の「である」構文の対応について」*Scientific Approaches to Language* 9、神田外語大学言語科学研究センター、pp.133-148.